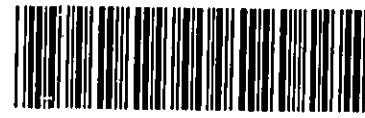


昭和八年

警視廳防疫年鑑

警視廳衛生部

国立保健医療科学院蔵書

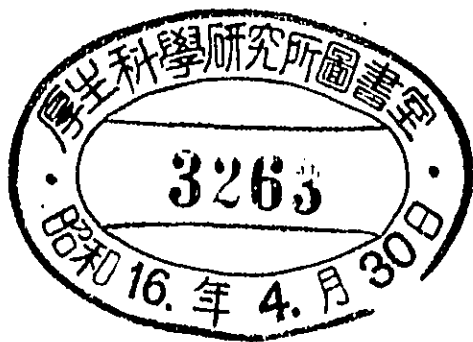


10012054



R-B
A B B 8
8

R-B
A B B 8
8



目次

第一章 傳染病流行ノ狀況

第一節 總說

最近十箇年各種傳染病患者發生數.....四
最近十箇年各種傳染病死亡者數.....五

(統計圖譜五葉)

第二節 腸「チフス」及「バラチフス」

一、一般狀況.....七
二、區郡別觀察.....七
三、季節別觀察.....八
四、年齡及性別觀察.....八
五、患者發見方法.....九
六、患者診定方法.....九
七、死亡率.....一〇

八、其ノ他.....一〇

附 井水汚染ニ由ル腸チフス爆發事例.....一一

統計

第一表 最近十箇年患者死者人口對比.....一四

第二表 患者發生區郡別.....一五

第三表 人口一萬ニ對スル患者發生區郡別.....一八

第四表 警察署別患者數及人口對比(昭和八年).....二一

第五表 患者發生月別.....二六

第六表ノ一 患者年齡性別.....二七

第六表ノ二 死亡者年齡性別.....二八

第七表 患者發見方法別.....二九

第八表 患者決定方法別.....三〇

第九表 患者死亡率.....三一

第十表ノ一 療養場所別.....三二

第十表ノ二 病院治療ト自宅治療ノ割合及死亡率比較.....三三

第十一表 死亡數並死亡率區郡別.....三四

第十二表 昭和八年發生患者ノ患家使用水.....三七

第十三表 一家ヨリ二名以上ノ患者發生.....三八

第三節 赤 痢 (疑似症及疫痢ヲ含ム).....三九

一、一般狀況.....三九

二、季節別觀察.....四一

三、區郡別觀察.....四二

四、年齡及性別觀察.....四二

五、死亡率.....四三

六、其ノ他.....四四

附 赤痢爆發事例.....四五

統計

第一表 最近十箇年發生患者及人口對比.....四九

第二表 患者發生月別.....五〇

第三表 患者發生區郡別.....五一

第四表	人口一萬ニ對スル患者發生區郡別	五四
第五表	警察署別患者數及人口對比(昭和八年)	五七
第六表ノ一	患者年齡別(疑似症及疫痢ヲ含ム)	六二
第六表ノ二	十歳以下ノ赤痢患者年齡細別	六三
第六表ノ三	疫痢患者ノミノ年齡別	六四
第六表ノ四	疫痢死亡者ノミノ年齡別	六五
第七表	患者死亡率	六六
第八表	死亡數並死亡率區郡別	六七
第九表	患者發見方法別	七〇
第十表	患者決定方法別	七一
第十一表	一家ヨリ二名以上ノ患者發生	七一
第十二表ノ一	療養場所別	七二
第十二表ノ二	病院治療ト自宅治療ノ割合及死亡率比較	七二
第四節	猩紅熱	七三
一、一般狀況		七三

二、區郡別觀察	七四
三、季節別觀察	七四
四、年齡及性別觀察	七五
五、死亡率	七五
六、其ノ他	七六

統計

第一表	最近十箇年患者及死者人口對比	七七
第二表ノ一	人口一萬ニ對スル患者發生區郡別	七八
第二表ノ二	昭和八年發生患者警察署別並人口對比	八一
第三表	患者發生月別	八六
第四表ノ一	患者年齡性別	八七
第四表ノ二	二十歳以下ノ年齡細別	八八
第五表	一家ヨリ二名以上ノ患者發生	九〇
第六表	死亡者數及死亡率累年比較	九〇
第七表	死亡者ノ年齡性別及死亡率	九一

第八表 患者發見方法別	九二
-------------	----

第五節 「デフテリア」	九三
-------------	----

一、一般狀況	九三
二、區郡別觀察	九三
三、季節別觀察	九四
四、年齡及性別觀察	九四
五、死亡率	九五
六、其ノ他	九六

統計

第一表 最近十箇年患者及死者人口對比	九七
第二表ノ一 人口一萬ニ對スル患者發生區郡別	九八
第二表ノ二 昭和八年發生患者警察署別並人口對比	一〇一
第三表 患者發生月別	一〇六
第四表ノ一 患者年齡性別	一〇七
第四表ノ二 人口一萬ニ對スル十歲以下ト十一歲以上ニ區分シタル罹患率	一〇八

第五表 患者決定方法別	一〇九
-------------	-----

第六表ノ一 死亡者數及死亡率累年比較	一〇九
--------------------	-----

第六表ノ二 死亡率區郡別	一一〇
--------------	-----

第七表 年齡性別死亡率	一一三
-------------	-----

第八表 療養場所別並死亡率	一一四
---------------	-----

第九表 患者發見方法別	一一五
-------------	-----

第十表 一家ヨリ二名以上ノ患者發生	一一六
-------------------	-----

第六節 痘瘡及流行性腦脊髓膜炎	一一七
-----------------	-----

第一、痘瘡	一一七
-------	-----

一、一般狀勢	一一七
--------	-----

二、患者發見ノ狀況	一一八
-----------	-----

統計 大正元年以降痘瘡患者月別發生數及死亡率	一二〇
------------------------	-----

第二、流行性腦脊髓膜炎	一二一
-------------	-----

統計

第一表 患者發生月別及死亡率	一二二
----------------	-----

第二表 患死者性別年齡別	一二三
--------------	-----

第二章 豫防施設ノ概要

第七節 腸「チフス」(「バラチフス」ヲ含ム)及赤痢ノ豫防

一、豫防知識ノ普及啓發	一二五
二、檢病の調査	一二九
三、死體檢案	一三〇
四、膽汁培養基ノ利用	一三一
五、野菜ノ取扱改善	一三二
六、牡蠣ノ取扱改善	一三三
七、菓子ノ取扱改善	一三六
八、井戸ノ構造改善	一三六
九、上水道ニ對スル措置	一三八
十、蠅ノ驅除	一三九
十一、庖厨改善	一四〇
十二、便所及下水道ノ改善	一四〇

第十三、保菌者檢案

第十四、腸「チフス」豫防注射

十五、^{赤痢}内服「ワクチン」ノ應用

第八節 「デフテリア」及猩紅熱ノ豫防

一、豫防知識ノ普及啓發	一五五
二、保菌者檢案	一五六
三、「デフテリア」豫防注射	一五六
第九節 其ノ他ノ傳染病豫防	一六九
一、痘瘡豫防	一六九
二、流行性腦脊髓膜炎ノ豫防	一七二
三、「ペスト」豫防	一七二

第三章 宮内關係防疫事務

一七四

昭和八年警視廳防疫年鑑

第一章 傳染病流行ノ狀況

第一節 總 說

警視廳管下ノ、最近十箇年ニ於ケル法定傳染病ノ動向ヲ概觀スルニ、關東大震災火災ノ餘殃トシテ大正十二年及十三年ニ消化器系傳染病患者ノ擡頭ヲ見タル以後ハ暫ク各病共ニ概ネ平靜ノ狀ヲ呈シ、殊ニ十種傳染病中久シク患者數ノ筆頭タリシ腸「チフス」ハ大正十三年ヲ頂點トシテ其ノ後年々頽勢ノ一路ヲ辿レリ、然ルニ昭和二年ヨリ俄然赤痢患者増騰シテ各病ノ首位ヲ占メ亦「ヂフテリア」、猩紅熱競テ患者數ヲ激増シ年ト共ニ愈々熾烈ヲ加フル感アリ、結局大正末年頃ハ各病合計ノ患者數一萬内外ヲ普通トセシモノガ躍進的增加ヲ以テ、昭和五年ニハ二萬名ヲ超ヘ昨七年ハ二萬三千四百ナリシヲ、更ニ本年ハ急騰シテ實ニ三萬六十三名ノ多數ヲ算シタリ、而シテ其ノ半數ハ赤痢(疑似症ヲ含ム)ニシテ他ノ一半ハ主トシテ「ヂフテリア」、猩紅熱及腸「チフス」ノ三病ニテ之ヲ擔ヘリ。

之ヲ人口一萬對患者發生率ヲ以テ觀ルトキハ、大正十二年及十三年ハ例外トシテ之ヲ問ハズ其ノ前後

ハ概ネ萬對比二七・内外ニ留マリシヲ昭和二年ヨリ頓ニ上昇シ、昨七年ハ四〇・六六、本年ハ更ニ躍騰シテ五〇・九六ニ及ヒ大震災直後タル大正十二、三年ノ發生率ヲモ稍凌駕スル狀勢ヲ呈セリ。

前記本年ノ患者ヲ病類別ニスレバ赤痢(疑似症ヲ含ム)一萬五千四百四名、腸「チフス」三千二百七十三名、「バラチフス」五百五名、乃チ消化器系ニ於テ一萬八千八百八十二名ヲ占メ、「デフテリア」六千六百十六名、猩紅熱四千九百八十五名、流行性腦脊髓膜炎五十八名、痘瘡七十二名、結局呼吸器系傳染病ニ於テ一萬一千百八十一名ヲ算シタリ、惟フニ本年ハ圖譜ニ示スガ如ク平年ニ比シテ、春寒秋冷著シク亦夏ハ暑氣猛烈ナリシ不順氣象ニ厄シテ、消化器、呼吸器系共ニ患者ヲ激生シタルコトハ疑フ餘地ナク、全國ノ患者統計ト傾向ヲ符節シ洵ニ防疫上多事ヲ極メタル年ナリキ。

次ニ累年ノ傳染病死亡數ニ就テ觀ルトキハ、十年前ハ年々三千内外ヲ普通トセシニ患者數ノ増加ニ伴ヒテ死亡數亦増シ、昭和三年ニハ遂ニ五千名ヲ超ヘタルモ昨年迄ハ毎年五千三、四百名ニ止マリシヲ本年ハ遂ニ六千三百四十六名ノ最高記録ヲ貽セリ、之ガ人口萬對死亡比例ハ本年一〇・七六ニシテ昭和三年ノ一〇・三六及四年ノ一〇・四一ヨリ漸次下降ノ傾向ヲ辿リシニ本年ハ聊カ反騰ノ狀ヲ示セリ然レドモ人口對患者數ノ著シク増騰セルニ比シ人口對死亡數ハ殆ト之ニ追從セズ毎年一〇人内外ニ止マレリ。

近年ノ一般趨勢トシテ各病患者多發ノ現象アル其ノ動因考察ノ爲ニ赤痢及「デフテリア」ニ就キ各本病

ト診定セラレタル死者ト別ニ之ト鑑別ヲ誤ラレ易キ疾患ニ依ル死亡數トヲ調査シ累年ノ比較ヲ見ルニ、都市膨脹人口増加ノ著シキ狀勢下ニ於テ猶、却テ年々其ノ死亡實數ヲ減少シツ、アル儼然タル事實アリ。惟フニ經濟界ノ不況其ノ他ニ基因スル幫助的事情ノ介在ナシトセザルモ主働トスル所ハ、傳染病豫防救治機關ノ整備ト豫防及手當ニ關スル民衆ノ知識向上ノ結果近時届出ヲ促進シテ患者數ヲ著シク嵩ムルニ至レルモ一方ニハ着々豫防救治ノ實ヲ舉ゲツ、アルコトヲ表現スルモノナリ。

以下章節ヲ追フテ各病流行ノ狀況ト之ガ豫防施設ノ概要ヲ輯録シ、以テ防疫事務ノ參考ニ貽サントス。

尙管下ニ發生スル赤痢中「アメーバ赤痢」ハ甚ダ稀ニシテ年々十名ヲ出デズ、亦近年「眼デフテリア」ノ届出ラル、モノアルモ共ニ年中數例ニ過ギザルヲ以テ本編ニハ之ガ論究ヲ省略セリ。

最近十箇年各種傳染病患者發生數 (警視廳管内)

年次	病名	「ペスト」	「コレラ」	赤痢	「腸チフス」	「バチルス」	痘疹	「チフス」	「チフス」	猩紅熱	「デリア」	流行性脳脊髄膜炎	計
大正十三年			八	三、七四	九、六七	五、五	一八	七四	一、五〇八	三、五	一、六、二四		
同十四年				三、〇七	五、六二	四、四	一	七九	一、五九	八〇	一、六、三		
昭和元年				三、二八	五、三三	五、三		一、〇七	一、四六	七	一、六、二		
同二年				六、二〇	三、九六	四、三	五	一、七六	二、二七	七	一、六、二		
同三年				八、七二	四、一五	四、五	七	二、五九	二、九六	七	一、八、五〇		
同四年				九、四七	三、九四	三、八	二	二、四六	三、四七	八	一、九、八〇		
同五年				二、〇二	三、八九	四、八		二、六七	二、五	七	二、〇、六一		
同六年				二、〇四	四、九四	五、三		三、二二	三、八七	八	二、〇、六		
同七年			三	二、五八	三、一〇	六、六		三、八二	四、二八	四	二、三、四〇		
同八年			一	一、五〇	三、七	五、五	七	四、九八	六、〇六	五	三、〇、〇		
計			八	八、三、九	四、七、九	四、八、六	三	二、四、〇	二、九、八	八	一、八、九、〇		
前九ヶ年			〇・五	四、二、三	二、七、四	二、七	〇・六	二、一、三	一、四、九	〇・五	一、〇、〇		
昭和八年				五、三、四	二、〇、八	一、六、八	〇・三	一、六、五	二、〇、八	〇・九	一、〇、〇		
對比分													
總百													
數分													
對比													

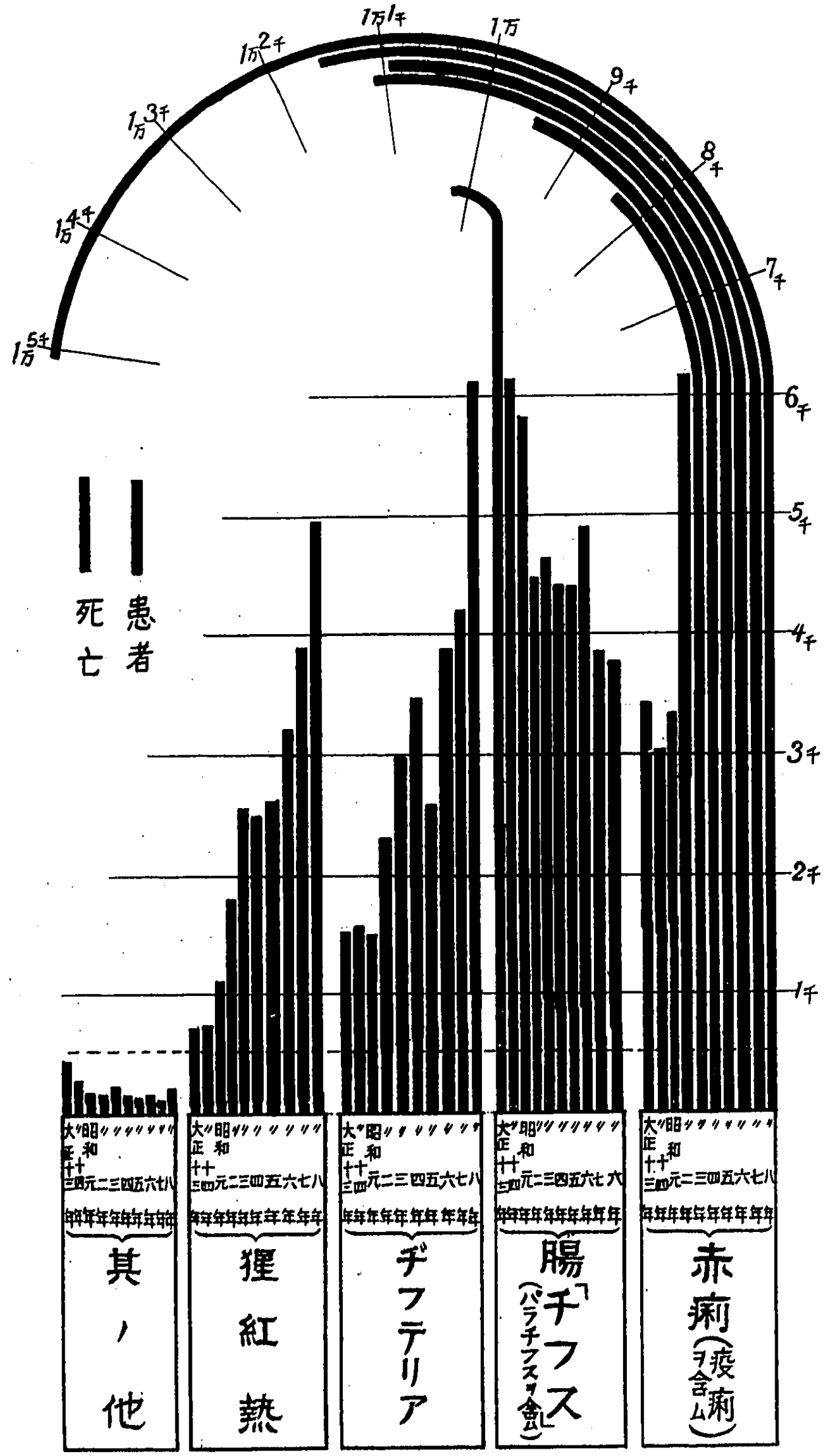
赤痢中ニ疑似症及疫痢ヲ含ム

最近十箇年各種傳染病死亡者數 (警視廳管内)

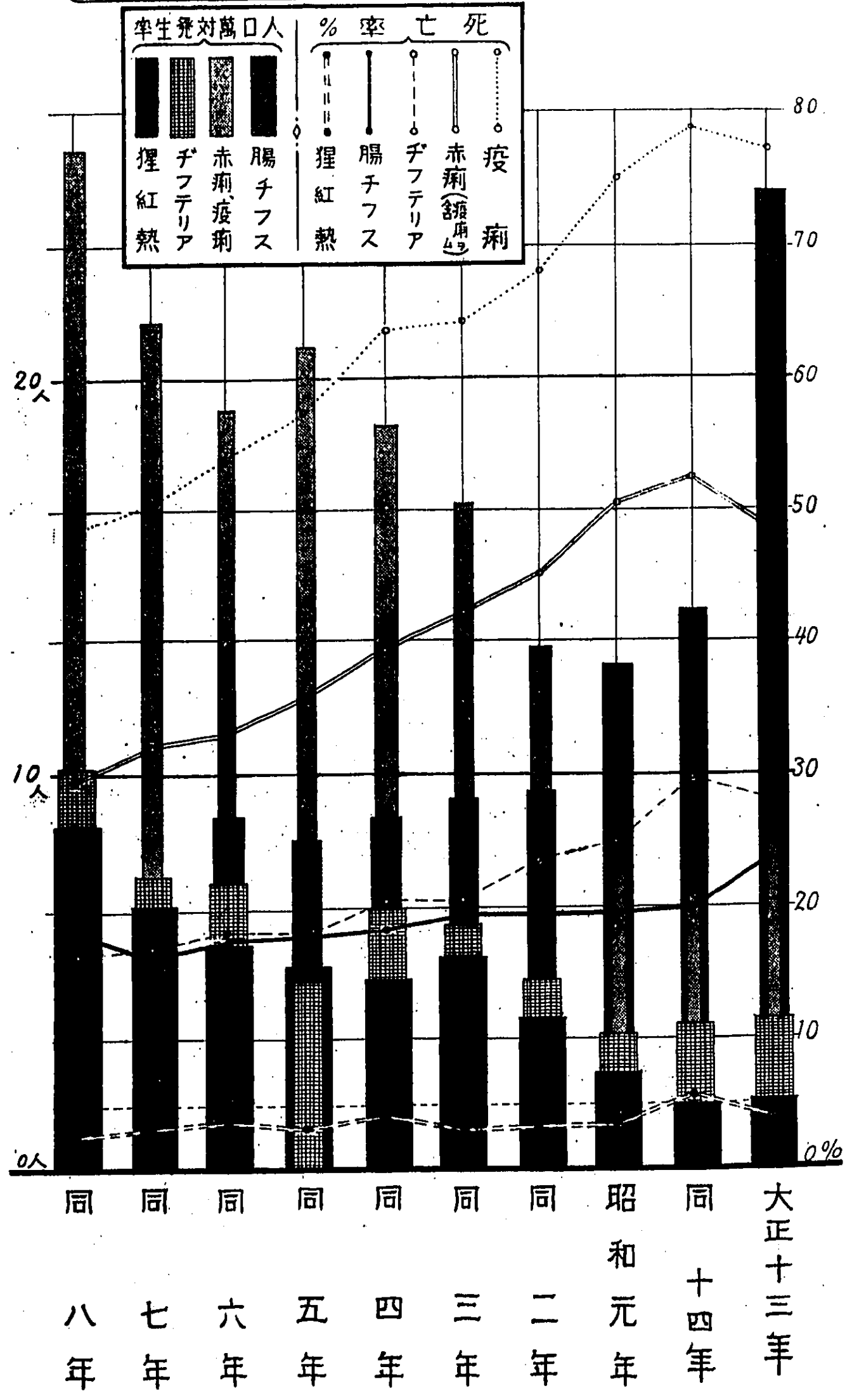
年次	病名	「ペスト」	「コレラ」	赤痢	「腸チフス」	「バチルス」	痘疹	「チフス」	「チフス」	猩紅熱	「デリア」	流行性脳脊髄膜炎	計
大正十三年				一、六四	二、二四	七	三	三	三	三	四、七	一、八	四、八、八
同十四年				一、五〇	一、二七	三				三	四、五	七	三、三、八
昭和元年				一、六三	一、〇九	四				四	三、一	五	三、三、三
同二年				二、八〇	八二	四				六	三、一	五	四、三、一
同三年				三、五九	八五	三				八	三、一	五	五、一、五
同四年				三、九四	九二	三				一〇	三、一	四	五、三、九
同五年				三、九四	九二	三				八	三、一	四	五、三、三
同六年				三、六八	八〇	三				八	三、一	四	五、三、三
同七年			一	三、七二	八二	三				八	三、一	四	五、三、三
同八年				四、四八	九二	三				九	三、一	四	六、三、四
計				三、〇、七	九、八、一	四、三	九	三	三	七、九	五、九、二	五、六、九	四、八、九、二
前九ヶ年				六、四、八	二、二、七	〇・八	〇・二	〇・二	〇・二	一、九	一、一、八	一、三、六	一、〇、〇
昭和八年				七、〇、五	一、〇、二	〇・五	〇・二	〇・二	〇・二	二、〇	一、五、七	〇・六	一、〇、〇
對比分													
總百													
數分													
對比													

赤痢中ニ疑似症及疫痢ヲ含ム

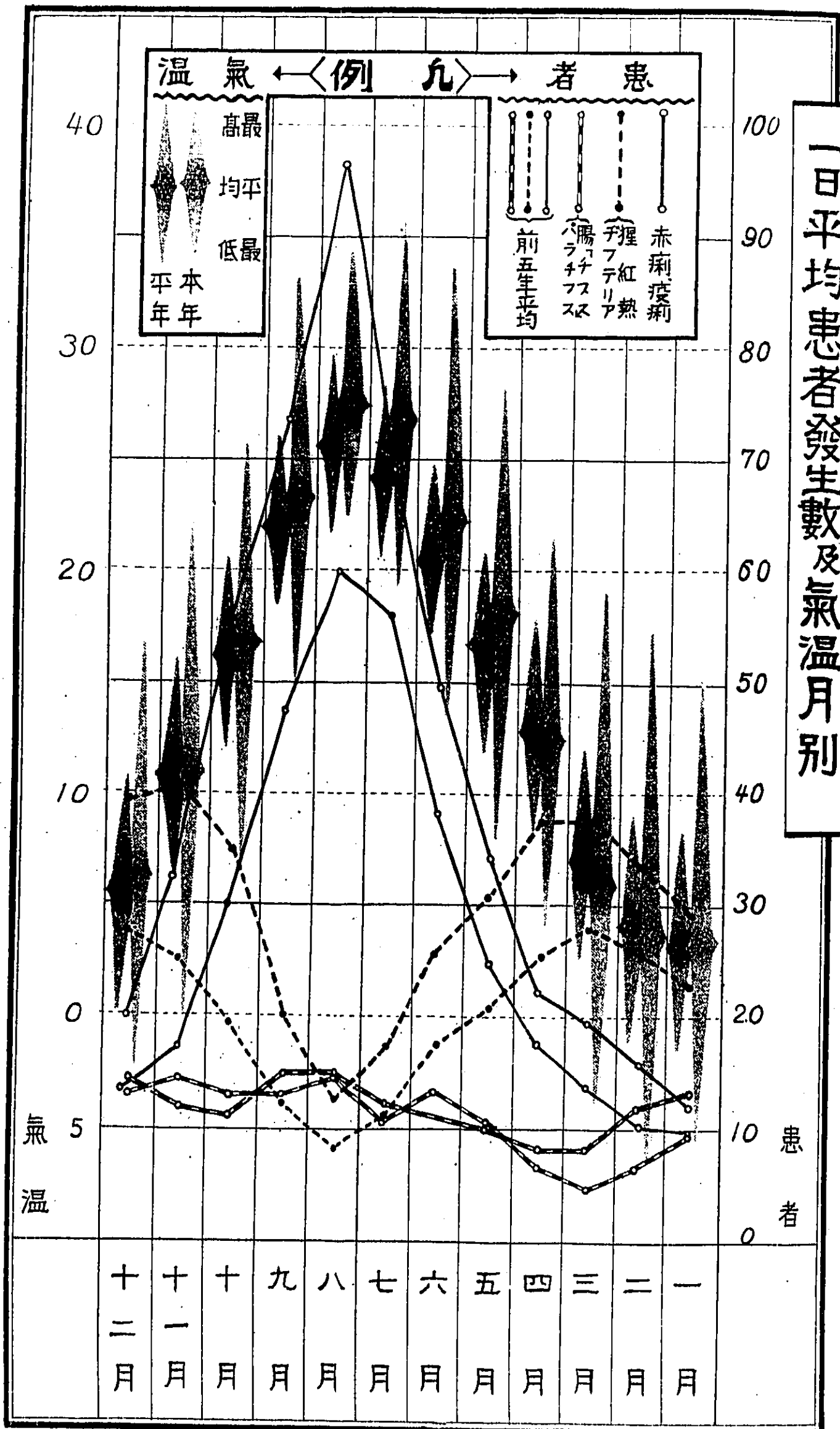
者死及者患病染傳年十近最



最近十年死亡率及人口對發生率

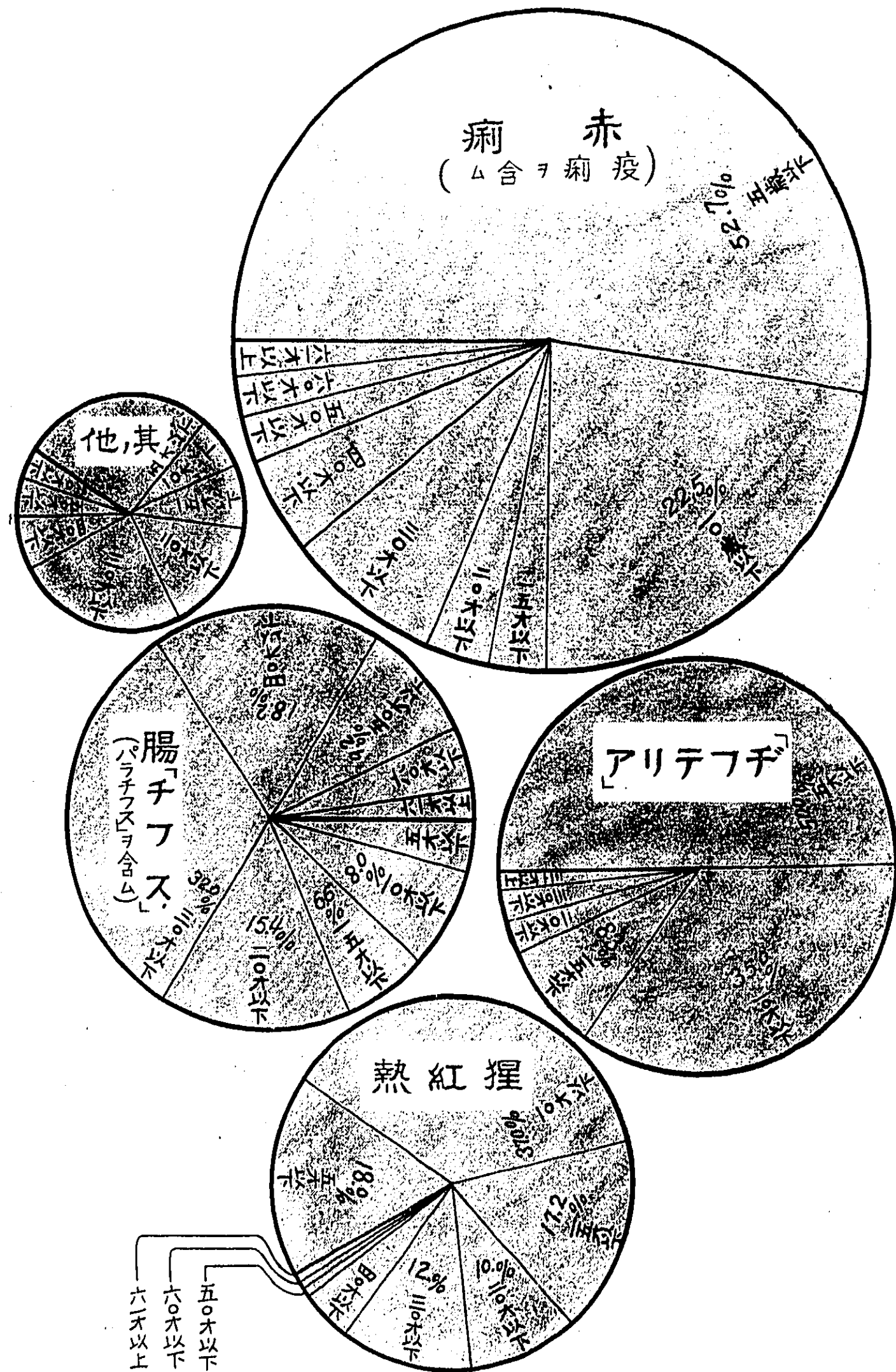


一日平均患者發生數及氣溫月別



別齡年,者患病染傳

均平年々五近最



人口一萬ニ対スル患者發生率區郡別

區 郡 別	人口萬對比	赤痢 (疫痢ヲ含ム)			腸チフス (パラチフス含ム)		チフテリア			猩紅熱				
		人	10	20	30	人	5	10	人	5	10	人	5	10
東京府	麹町													
	神田													
	日本橋													
	京橋													
	芝													
	麻布													
	赤坂													
	四谷													
	牛込													
	小石川													
東京市	本郷													
	下谷													
	浅草													
	本所													
	深川													
	品川													
	目黒													
	荏原													
	大森													
	蒲田													
東京市	世田谷													
	渋谷													
	澁谷													
	中野													
	杉並													
	豊島													
	滝野川													
	荒川													
	王子													
	板橋													
東京市	足立													
	向島													
	城東													
	葛飾													
	江戸川													
	八王子市													
	南多摩郡													
	北多摩郡													
	西多摩郡													
	島嶼													
全管内平均														

至自昭和四年五年間平均

腸チフス
ラチフス

ノ
流行状況

第二節 腸チフス及バラチフス

一、一般狀況

本年ハ別項ニ掲クル如キ井水ノ媒介ニ由ル小爆發及深川區所在ノ某官營食料品取扱所ニ於テ多數ノ食中毒者ヲ發生シ其ノ中ヨリ「バラチフス」B菌陽性者九名ヲ出シタルコト、竝一所ヨリ數名ノ腸「チフス」患者ヲ出シタル以外ニハ爆發性及密集性ノ流行ナク平靜ニ終始シ、腸「チフス」患者ハ三千二百七十三名ヲ算シテ昨年數ヨリ七十名ヲ増加セルモ「バラチフス」ハ五百五名ニシテ昨年ヨリ却テ百名ヲ減ジ、合計三千七百七十八名ニシテ人口萬對發生率ハ六・四〇ニ過ギズ、發生率ニテハ勿論患者實數ニ於テモ稀ナル減少狀態ヲ呈セリ。(第一表參照)

二、區郡別觀察

人口萬對患者發生率ニ就テ觀ルニ、本年最モ發生率ノ高カリシハ本郷區ノ一二・四四ニシテ深川區ノ一〇・一四、赤坂區ノ九・四〇、牛込區ノ九・一九、麻布區ノ九・〇二之ニ次ゲリ最近五箇年平均ニ於テハ依然麻布區ヲ首位トシ、赤坂、麴町、本郷、四谷、芝、牛込、小石川、深川、品川、杉並、淀橋、澁谷、下谷、日本橋ノ順位ニシテ、依然トシテ舊市域ノ山手方面及之ニ接續スル西南方面ノ住宅地域ニ亘リテ發生率高ク、商業地區及工業地區並東北部ノ郊外地帶ニハ發生率概シテ低シ。

又八王子市及三多摩郡地方ハ東京市ニ比シテ發生率遙カニ低シ、但シ「バラチフス」患者ハ却テ此ノ地方ニ發生多キ傾向アリ。(第二乃至第四表參照)

三、季節別觀察

全國ノ患者統計ニ據レバ毎年夏秋ノ候ニ最モ患者多發スルヲ例トセルモ、管下ニ於テハ夏秋季ト雖格別蔓延スルコトナク冬季ニ比較的患者多發ノ傾向ヲ認メツ、アルガ、本年モ二月乃至四月ノ發生稍低キ感アルモ他ノ傳染病ニ於ケル如キ季節的弛張ナク略各月ニ均勢セリ。

蓋シ本病ニ對スル豫防注射ガ主トシテ陽春ヨリ初夏ノ間ニ施行セラル、風アルヲ以テ其ノ大衆免疫ニ由リテ夏秋ノ患者發生ヲ抑制セルヤニ察知セラレ、又秋冬季ニハ野菜、牡蠣等ガ病毒ヲ媒介スルコト多キニ起因シテ流行擡頭スルヤニ認メラル。

尙大東京ノ南西ノ一半ニ於テハ特ニ冬季ニ患者ノ發生多ク、北東半部ハ之ニ反シテ夏季ニ多キ傾アリ。(第五表並圖譜參照)

四、年齡及性別觀察

本病ハ十六歲以上四十歲迄ノ青壯年期ニ最モ罹患率高キコトハ累年統計ノ示セル所ナリ、最近五年平均ニ於テハ此ノ年齡級ノ罹患者ガ總患者數ノ六五・五六%ヲ占ムル狀況ニアリ。

又性別ニ於テハ、女性ヨリモ男性ニ患者多キヲ常トシ最近五箇年ノ割合ハ男ノ五六・九八ニ對シ女

ハ四三・〇二ヲ示セリ、然ルニ保菌者ニ於テハ之ニ反シテ男性ヨリモ女性ノ方多キヲ常トセリ。

尙患者ノ死亡率ヲ年齡別ニ觀察スルトキハ第六表ノ二ニ於ケルガ如ク十歲以下ノ死亡率ハ約六・%ナルガ年齡ヲ倍スル毎ニ亦死亡率ヲモ倍加シ居レリ。(第六表ノ一、二及圖譜參照)

五、患者發見方法

膽汁培養基ノ利用獎勵ヲ始メ患者ノ早期診定ニ就テハ夙ニ施設ニ宣傳ニ盡瘁シツ、アリト雖尙現ニ罹病シ居レルニ拘ラズ醫療ヲ受ケザル者アリ、或ハ屢々主治醫ヲ變ヘテ診定ヲ荏苒シ爲ニ病毒ヲ散蔓セシムル等ノ弊尠カラザルヲ以テ、機宜ニ檢病の戸口調査ヲ行ヒ又疑ハシキ死者ニ對シテハ死體檢案ヲ施行シツ、アリ、是等ノ方法ニ依リ本年警察ニ於テ發見シタル患死者ハ百三名ニ及ビ總患者數ノ二・七三%ニ相當セリ而シテ醫師ノ届出ニカ、ルモノハ九七・一四%ナリ。(第七表參照)

六、患者診定方法

「チフス」患者ハ發病後ノ菌排泄時期比較的遲シセラレアルヲ以テ此ノ排菌期以前ニ診斷ヲ確定スルコトハ實ニ本病豫防ノ要訣トスル所ナリ、當廳ニ於テハ後節豫防施設ノ項ニ述ブル如ク年々「アンブル」入膽汁培養基ヲ製造シ豫メ若干數ヲ開業醫家ニ配付シ置キテ、「チフス」ニ疑ハシキ患者ヲ診察シタルトキハ速ニ之ヲ利用スルヤウ勸説シツ、アリ、本年中當廳製造ノモノ並他ノ病院等ニ於テ造レルモノヲ合シ膽汁培養基ニ據リテ診斷ヲ確定シタルモノハ總患者三千七百七十八名中實ニ

千六百名ノ多數ニ及ビ其ノ他尿尿ヲ検査シテ決定シタルモノ百八十三名、「ゲキダール」反應ヲ參照シテ決定シタルモノ三百九十三名、結局細菌學的決定ハ總患者ノ五七・六〇%ニ及ビ臨床所見ノミヲ以テ決定シタルモノハ四二・四〇%ニ過ギズシテ、臨床決定ハ逐年減少シツ、アリ。(第八表參照)

七、死 亡 率

本年腸「チフス」患者ノ死亡率ハ第九表ノ如ク二〇・五九%ニシテ、昨年ニ比シテ著シク増率セルノミナラズ昭和三年以前ノ二〇%線上ニ還元シタルコトハ聊カ遺憾トスル所ナリ。

「バラチフス」患者ノ本年死亡率ハ六・九三%ニシテ、腸「チフス」「バラチフス」合算ニ於テハ一八・七七%ニ相當セリ。

療養場所別ニ就テ觀ルトキハ第十表ノ二ノ如ク、依然官公立病院收容者ニ死亡率低ク私立病院收容竝自宅治療患者ニハ著シク高率ヲ示セリ、尙年齡別ニ於テハ前項記述ノ如ク幼年者ハ死亡率極メテ低ク、年長スルニ從ヒ著シク昂騰スルヲ常トセリ。

第十一表ノ地方別死亡率ニ就テハ「バラチフス」患者ノ含有割合ヲ一應斟酌シテ觀察スベキモノナルガ、大體ニ於テ患者發生率ノ低シトスル地方ニ死亡率高キ傾向アルコトハ豫防上遺憾トスル所ナリ。

八、其 ノ 他

患家ノ使用水ヲ調査スルニ第十二表ノ如シ、又一家ヨリ二名以上ノ患者ヲ發生シタルモノハ第十三表ノ如ク本年二百二戸四百八十三名ニシテ總患者ノ一二・七八%ニ及ベリ。

●井水汚染ニ由ル腸「チフス」爆發事例

一、時 昭和八年九月

二、場所 東京市荏原區戸越町

三、原因及患者發生狀況

某職工ノ二男〇〇光男當八歳ナル者八月十八日發病、同三十日腸「チフス」ニ細菌學的決定シタルガ、其ノ決定前患家ニ於テハ被服其他ノ病毒汚染物ヲ再三洗濯シ汚物ヲ下水ニ投棄シタル事實アリ、而シテ其ノ下水溝ハ極メテ不完全ニシテ加フルニ傍ラニ不完全ナル井戸在リシ爲病毒ハ汚水ト共ニ井戸中ニ侵入シ遂ニ左記ノ如ク十二名ノ患者ト二名ノ保菌者ヲ爆發スルニ至リシモノト推定セラレタリ。

第一系

(甲) 初發患家ノ井戸流シヨリ、九米ノ下流ニ於テ下水溝(古土管類ノ應用材料ヲ以テ作り間隙多シ)ヨリ一米ヲ距ル位置ニ開放井戸アリ、今次ノ患者爆發ニ依リ逸早ク井水ヲ汲ミテ細菌検査ヲ行ヒタルニ無數ノ大腸菌ヲ認め又實驗ノ結果當然ニ初發患家ヨリ流出シタル病毒ノ侵入シタルコトヲ肯定セラレタリ。

而シテ此井戸ヲ元井戸トシテ約十五米下位ニ引水シタル井戸溜ヲ設ケ、之ヲ四戸十九人ノ世帯ニ使用シ居レルガ其ノ内、い家三名、ろ家一名、は家一名、計三戸五名ハ九月十二日乃至十八日頃發病シテ同二十一日乃至三十日ノ間ニ細菌學的或ハ臨床的ニ夫々腸「チフス」ト決定セリ。又保菌者檢索ノ結果、ろ家ニ一名、は家一名計二名ノ保菌者ヲ發見シ、全然異常者ヲ出サリシハ、へ家一戸ノミナリキ尤モ同家ニハ四人中戸主及初生兒ヲ除キ他ノ二名ハ豫防注射ヲ受ケ居リタリ。

(乙) 一家ヨリ三名ノ患者ヲ出シタルい家ハ蕎麥屋ヲ營メリ、同家ニハ上水道栓ヲ有スルモ水道水ハ夏季盛蕎麥ヲ作ルニ適セズトテ該井戸水ヲ用ヒテ蕎麥ヲ冷シ之ヲ顧客ニ供シツ、アリタリ、爲ニ附近住民ニシテ同蕎麥屋ヨリ盛蕎麥ヲ取寄セ食シタル後(甲)系ト同様ノ潜伏期ヲ以テ九月十二日乃至十八日ノ間ニ發病シタル者三戸四名アリ、何レモ細菌學的ニ腸「チフス」ト決定セリ。當時同蕎麥屋ノ店ニ入りテ食シタル客モ相當アルヲ以テ此ノ内ニ罹患者ナキカラ一應調査シタルモ、斯カ

ル人ハ所謂通り懸リノ者ニシテ近在居住者ニアラズ、一面腸「チフス」ハ其ノ潜伏期長キ爲人々ノ記憶ニ漏レズノ如キ場合集團人ニアラザル限り容易ニ系統ヲ把握シ得ズ遂ニ不明ニ畢レリ。

第二系

第一系ノ元井戸ヨリ更ニ十米下位ニ於テ同一下水溝ノ對側ニ、下水ヨリ僅カ〇・三米ヲ離レテ一個ノ井戸アリ、構造閉鎖式ヲ模倣セルモ地盤面下一米弱ヲ砂土ニテ埋メタルニ過ギザル不完全ナルモノナリ。

是亦初發患家ヨリ流シタル汚水侵入シ、其ノ井水使用者二戸五人中と家ノ一名ハ九月十五日發病、ち家ノ一名ハ同十日發病シ兩名共腸「チフス」ト決定セルガち家ニ於テハ更ニ同居人一名九月二十三日發病シ前同様細菌學的ニ腸「チフス」ト診定セラレタリ但シ右ハ潜伏期ヨリシテ或ハ二次的感染ト見ルヲ妥當トスベキカ。

第一表 最近十箇年患者死者人口對比

年次	人口	患者發生實數		人口一萬對比	
		腸「チフス」 「パラチフス」	計	患者	死者
大正十三年	四、一二三、六九〇	九、六五七	五、三五五	一〇、一九二	五、六一
同十四年	四、三三五、四二一	五、六八一	四、三四四	六、一一五	二、八〇
昭和元年	四、五三六、四九五	五、二五七	五、一二二	五、七六九	一二、七二
同二年	四、七七一、〇七七	三、九八六	四、〇三三	四、三八九	九、三〇
同三年	四、九七六、七五九	四、一五九	四、一五	四、五七四	九、一九
同四年	五、一七八、五七六	三、九四二	三八〇	四、三二二	八、三五
同五年	五、三三三、〇五〇	三、八三九	四七八	四、三一七	八、一三
同六年	五、四九七、二九四	四、一九四	五九三	四、七八七	八、七一
同七年	五、七五五、三〇二	三、二〇三	六〇六	三、八〇九	六、六二
同八年	五、八九九、二一八	三、二七三	五〇五	三、七七八	六、四〇

備考 本表人口ハ警察署調査ニ依ル各年末現在ナリ

第二表 患者發生區郡別

區郡名	昭和四年		昭和五年		昭和六年		昭和七年		昭和八年		計	
	腸「チフス」 「パラチフス」	計	腸「チフス」 「パラチフス」	計	腸「チフス」 「パラチフス」	計	腸「チフス」 「パラチフス」	計	腸「チフス」 「パラチフス」	計	腸「チフス」 「パラチフス」	計
東												
麴町區	六	七三	八	八五	九	九六	八	八七	三	三三	二七	四〇
神田區	八	九〇	一〇	一二	一二	一三	一六	一八	一〇	二七	四八	四七
日本橋區	七	八二	一〇	一二	一二	一三	一六	一八	九	二七	四八	四七
京橋區	七	八二	一〇	一二	一二	一三	一六	一八	九	二七	四八	四七
芝區	一七	一八五	一四	一五七	一〇	一一〇	一七	一八七	二〇	二一七	八三	九六
麻布區	一〇	一一三	一七	一八七	一六	一七二	一七	一八七	二〇	二一七	八三	九六
赤坂區	五	六六	九	一〇八	六	六六	五	五五	九	一〇八	四七	五五
四谷區	九	一〇六	一三	一四六	九	一〇八	八	八七	八	八七	三七	四三
牛込區	九	一〇三	一四	一五七	一〇	一一〇	一〇	一一〇	九	一〇八	三七	四三
小石川區	一八	一九八	一五	一六〇	一五	一六〇	一五	一六〇	一〇	一〇七	六四	七二
本郷區	一三	一三〇	一五	一六〇	一五	一六〇	一五	一六〇	一〇	一〇七	六四	七二
下谷區	一八	一九八	一五	一六〇	一五	一六〇	一五	一六〇	一〇	一〇七	六四	七二
淺草區	一六	一七六	一七	一八七	一四	一五四	一六	一七六	一四	一五四	六九	七六
本所區	一八	一九八	一五	一六〇	一五	一六〇	一五	一六〇	一〇	一〇七	六四	七二
深川區	二七	二八七	二八	二九八	二五	二六〇	二五	二六〇	一八	一九七	七六	八四